

愛媛県上黒岩遺跡における 生活空間について

縄文時代草創期・早期の定住化に関連して

Living Space at the Kamikuroiwa Site in Ehime Prefecture : In Connection
with Settlement at the Initial Stage of the Jomon Period and in the Early
Jomon Period

矢作健二

YAHAGI Kenji

はじめに

- ①上黒岩遺跡の位置と地質・地形・層序および発掘調査成果
- ②最終氷期から後氷期に至る環境変動と上黒岩遺跡周辺の地形形成
- ③上黒岩遺跡における段丘の認識

【論文要旨】

縄文時代草創期・早期の遺跡である愛媛県上黒岩遺跡は、これまで岩陰遺跡として発掘調査がなされ、最近では、その成果の再調査と再評価により、縄文時代草創期には狩猟活動に伴うキャンプサイト、早期には一定の集団が通年的な居住をしていたと考えられている。しかし、岩陰からの明確な遺構の検出記録はない。上黒岩遺跡の岩陰を構成している石灰岩体の分布や山地を構成している泥質片岩の分布に、縄文時代草創期から早期に至る時期の気候変動を合わせて考えると、遺構を遺すような生活空間は、山地斜面と久万川との間に形成された狭小な段丘上の地形にあったと推定される。

【キーワード】 晩氷期・新ドリラス期・河谷の埋積と浸食・生活空間・活動痕跡

はじめに

国指定史跡である上黒岩遺跡（指定名称は上黒岩岩陰遺跡であるが、ここでは春成・小林編〔2009〕で用いられている上黒岩遺跡の名称を用いる）は、西日本における縄文時代草創期および早期の遺跡として既にその重要性は古くから知られている。最近では国立歴史民俗博物館が、個別共同研究として過去の調査成果を再整理し、新たな自然科学分析結果等も加えて報告書を作成した〔春成・小林編、2009〕。筆者は、その共同研究に参画し、40年前の発掘調査時には、ほとんど考慮されることのなかった、遺跡周辺の地形や地質を確認し、また、史跡内に一部保存されている遺物包含層を含む堆積層断面の観察を行った。上黒岩遺跡にこうした作業に関わる間、上黒岩遺跡については「岩陰遺跡」とも呼ばれている場面にしばしば遭遇した。一般的に考古学で言うところの岩陰遺跡とは、庇状に張り出した岩石からなる崖の下を居住空間あるいは墓などに利用したという意味を持っているが、確かに上黒岩遺跡は、現地表からの高さ約15mほどの石灰岩からなる岩体の基部に形成された窪み状の空間から多量の遺物が出土しており、埋葬人骨も確認されていることから、岩陰遺跡という名称には何ら不都合はない。さらに、春成〔2009〕は上黒岩遺跡の居住空間として、岩陰の下で雨水が落ちてこないほぼ $4\text{m} \times 20\text{m} = 80\text{m}^2$ という範囲を設定し、そこから上黒岩集団の人口の推定もしている。

縄文時代草創期の居住空間については、小林〔2010〕が上黒岩遺跡に関連して神奈川県藤沢市にある慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（SFC）内遺跡の例をあげ、そこでは炭化物集中とその周囲に赤化した礫をもつ炉跡とそれを取り囲む環状のピット列からなる住居状遺構が丘陵上に検出されていることを説明している（図1）。一方、上黒岩遺跡の発掘調査成果では、豊富な遺物の出土に対して、遺構の検出はほとんど報告されていない。岩陰自体が巨大な遺構であるとも言えるが、それにしても縄文時代草創期はもとより、幼少児をかかえた老若男女の集団が一定期間ここで生活していた〔春成、2009〕とされる縄文時代早期においても、岩陰の発掘調査範囲からは何の遺構も検出されていないということはやや不自然である。おそらく、遺物を遺した人々は岩陰には遺構を遺さなかったのであろう。彼らが遺構を遺した場所とは、岩陰から、はずれた範囲にあったのではないだろうか。岩陰ではなく、岩陰の周りを日常生活の主たる場所としていた場合には、そこに多くの遺構が遺されている可能性がある。

「岩陰の周り」に相当する範囲としては、東側に山地斜面が迫り、西側を久万川によって区切られた狭小なテラス状の地形（河岸段丘）の上面を想定することができる。現在では山地斜面側に住宅があり、その西側に村道がほぼ南北方向に走り、村道の西側の久万川の河原に向かう斜面には水田が造られており、まさに人々の生活空間の中心となっている。本文では、河岸段丘と山地斜面と久万川および上黒岩遺跡の堆積層から推定される地形発達史とその要因となっている環境変動という視点から、縄文時代草創期および早期において河岸段丘が生活の場となり得たことを述べたい。さらに、河岸段丘上の遺構が、岩陰で出土した遺物と同様に、厚い堆積物の下に遺されている可能性についても考察する。

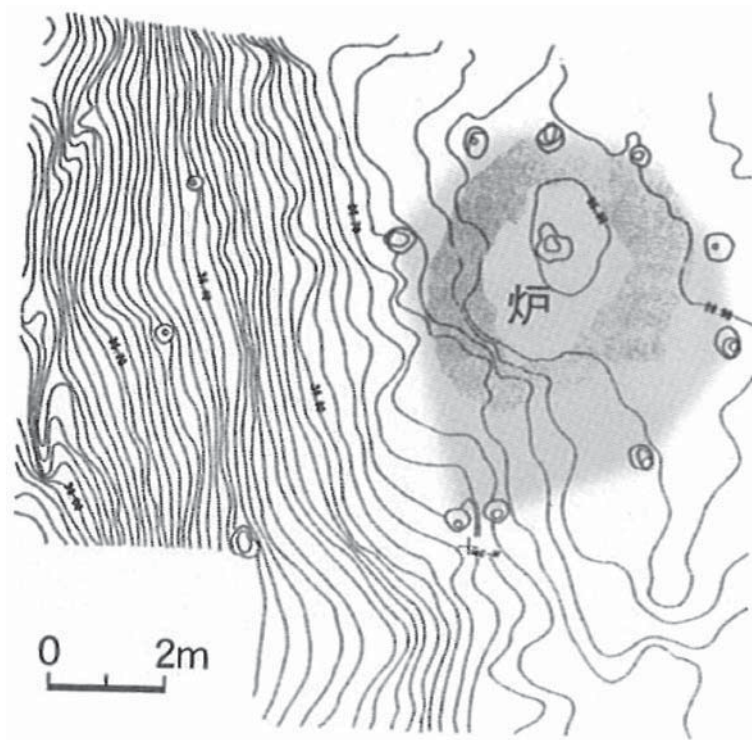


図1 縄文時代草創期における住居状遺構の例
[神奈川県 SFC 内遺跡群 小林, 2010 より抜粋]

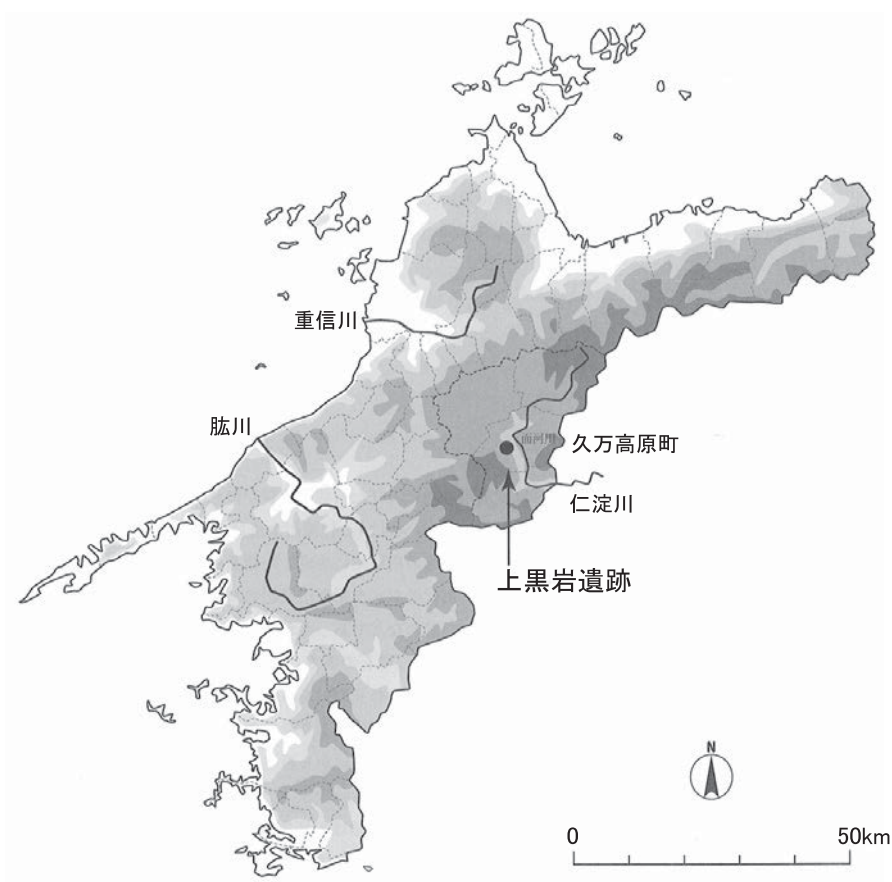


図2 愛媛県における上黒岩遺跡の位置(1) [小林, 2009 より抜粋]

①……………上黒岩遺跡の位置と地質・地形・層序および発掘調査成果 [春成・小林編,2009より引用・抜粋]

(1)位置・地質・地形

上黒岩遺跡は、愛媛県上浮穴郡久万高原町上黒岩に所在する。瀬戸内海と太平洋の分水嶺となっている三坂峠付近を水源とする久万川と西日本最高峰の石鎚山の南西麓を水源とする面河川とが合流する地点から、久万川を約3km遡った右岸に遺跡は立地する(図2・3)。久万川は面河川と合流した後、南下して高知県に入り仁淀川と合流して土佐湾に注ぐ。上黒岩遺跡は、仁淀川の最上流域とも言える四国山地の山々に囲まれた標高約400mほどの谷間にある。

上黒岩遺跡の位置は、既存の地質図(図4)によれば、三波川帯西部の南寄りに相当する。三波川帯を構成する岩石は中生代の白亜紀に生成した結晶片岩であるが、詳細には、泥岩などが変成してできた泥質片岩、砂岩などが変成してできた砂質片岩、凝灰岩や溶岩などが変成してできた緑色片岩、溶岩が軽度に変成した緑色岩などに分かれる。上黒岩遺跡周辺に分布する岩石は泥質片岩を主体とし、遺跡の南側に連なる山地には主に緑色岩が分布している。泥質片岩中には、局所的に石灰岩の岩体も散在することが記載されている。筆者らは、現地を踏査し、上黒岩遺跡の岩陰を作っている岩体は石灰岩であり、その石灰岩体の周囲には泥質片岩(黒雲母片岩)が広く分布していることを確認した。また、泥質片岩の分布する岩陰周囲の斜面の表層には、泥質片岩の破片を含む褐色の土壌が形成されていることも確認できた。

上黒岩遺跡背後の山地地形であるが、図5の地形図を見てわかるように、主要な尾根から枝分かれした尾根が、何本か手の指のように久万川に向かって伸びている。これらのうち、現地で確認できた範囲では、3本の尾根が石灰岩の岩体により構成されており、1本の尾根が泥質片岩中に形成された石英脈に由来することが確かめられた。いずれも、泥質片岩よりも風化に対する抵抗性が高いために、周囲よりも突出し、尾根を形成したものと考えられる。前述したように山地斜面と久万川の河道との間には、現在、住宅や道路および畑・水田などに利用されている狭小な段丘が広がっている。現在の段丘上面の地形はほとんど人工改変されている。

(2)層序および発掘調査成果

上黒岩遺跡の層序は、古墳時代とされる第1層から後期旧石器時代の可能性があると考えられる第14層まで設定されている。その中で、第9層が約14,500年前、縄文時代草創期前半の隆起線文土器の包含層、第6層が約12,000年前、縄文時代草創期後半の無文土器の包含層、第4層が約10,000年前、縄文時代早期の押型文土器の包含層とされている。土器および石器の出土量は、早期のものが最も多く、また埋葬人骨なども出土している。

現在保存されている土層断面(図6)では第10層から第4層までの層位が確認されている(図7)。第6層から第10層までは、巨礫(各層における最大径300mm前後)を含む礫層であり、礫径の淘汰は不良である。その中で、各層に比較的多い礫径の傾向は、第6層は径20mm前後で、第7層では径30mm前後、第8層では径150mm前後と、上位ほど礫径が小さくなる傾向が窺える。な

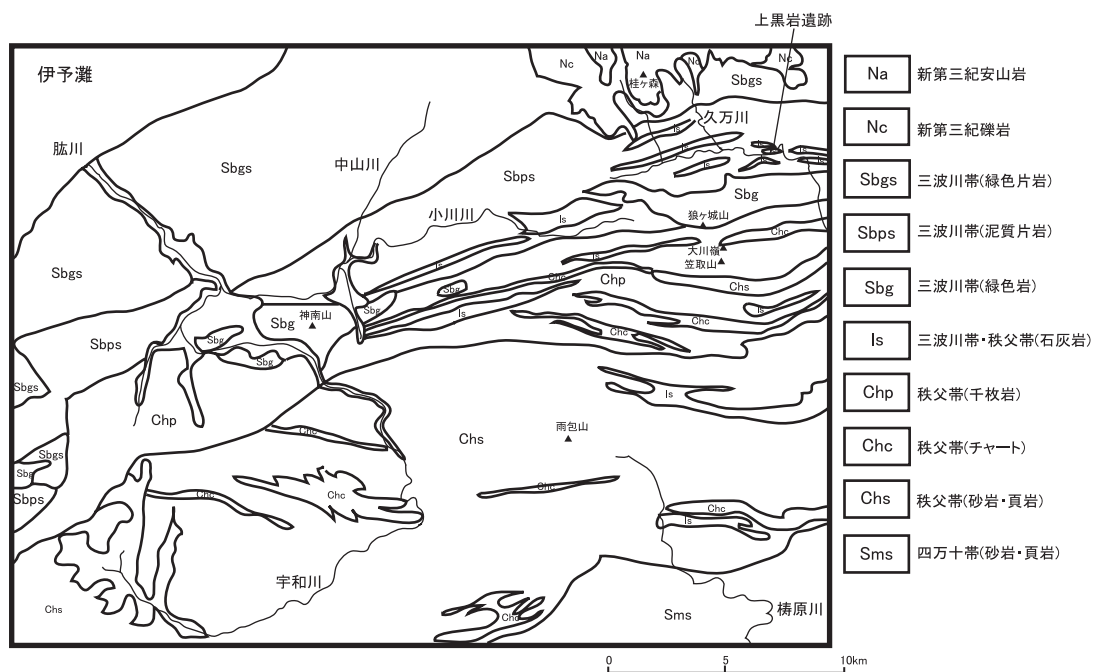


図4 久万川上流域周辺の地質〔地質部編図課編(1957)より引用抜粋〕

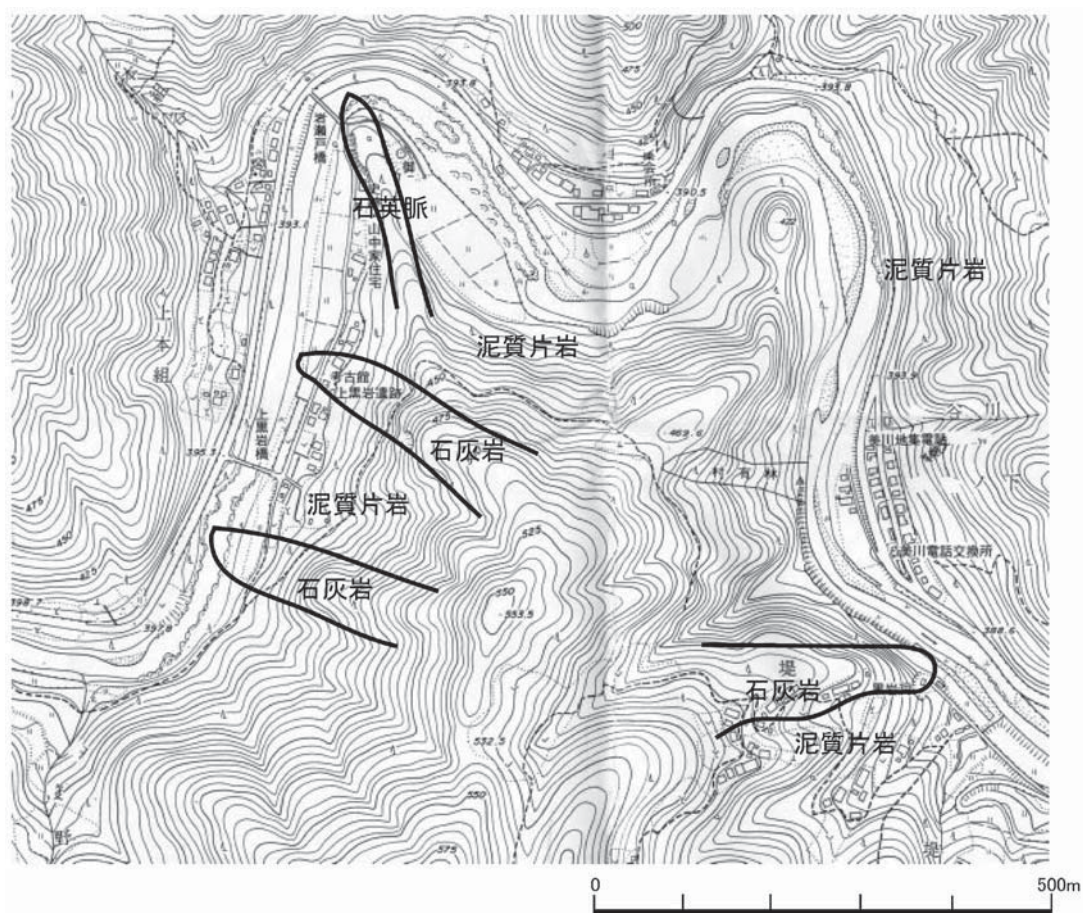


図5 上黒岩遺跡周囲の岩石分布

お、第10層では、断面の状態が不良なため、礫径の傾向は把握できず、第9層は、礫よりもシルト分の方がやや多い傾向を示す。また、第6層の上部にはシルト分が多く含まれており、カワニナの貝殻の集中部も認められた。第5層も礫層であるが、巨礫は含まれず、最大径は90mm程度、多くの礫は径10～20mm程度である。

第5層から第10層まで共通する特徴としては、礫は多くが角礫・板状であることと各層内には成層構造等が認められないこと、礫の傾きがほぼ水平に近いということが挙げられる。礫種については、第6層から第10層までは石灰岩が多く、第5層は泥質片岩が多いとみられる。また、第5層と第6層の層界および第8層と第9層の層界は比較的明瞭であるが、第6層から第8層までの各層間の層界と第9層と第10層の層界は不明瞭である。各層の層厚は、5層で約80cm、6層から8層までは、それぞれ20～30cmほど、9層は約60cm、10層は下限が不明であるが露出部分は50cmほどであった。



図6 上黒岩遺跡の岩陰の現状

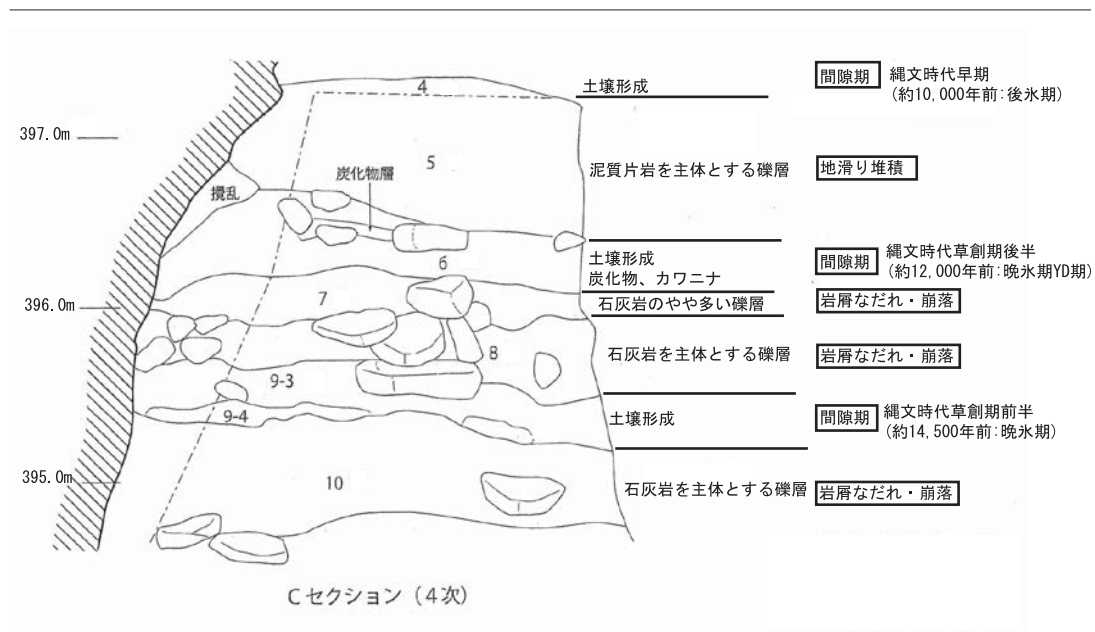


図7 上黒岩遺跡の岩陰下の堆積層〔橋本・矢作, 2009 一部修正〕

② 最終氷期から後氷期に至る環境変動と上黒岩遺跡周辺の地形形成

(1) 最終氷期における久万川の河谷の埋積と旧石器人の活動

上黒岩遺跡では、第3次調査時の最下層の第14層から後期旧石器時代とされる横長剥片の出土が記録されているが、これについて春成〔2009〕は資料を確認できなかったとしながらも概報に記述された作製技法から、約28,000年前頃のものとしている。第四紀の環境変遷史からみれば、28,000年前頃と言う年代はいわゆる最終氷期と呼ばれる寒冷な時期の中にあり、しかも最も寒冷な時期（最終氷期極相期）とされる約20,000年前に向かう時期に相当する。したがって上黒岩遺跡周辺の地形形成を考える場合には、最終氷期まで遡らなければならない。最終氷期における日本の山間地の河川上流域では、河谷の埋積が進んだとされている。これは、気候の寒冷化により森林限界が低下し、周氷河地域の拡大や周氷河作用の活発化が起こり、岩屑生産が増大したことで氷期における降水量の減少により河谷内の堆積が促進されたことなどによると考えられている〔米倉ほか編, 2001〕。ただし、須貝〔1992〕は、群馬県の利根川支流碓氷川における氷期の河谷の埋積については、最終氷期における森林限界は低下したといっても標高1,000m程度であったことを理由に、標高1,000mを超える地域がわずかな碓氷川流域では氷期でも斜面の大半は森林に覆われていたことから、岩屑の生産が増大したことによるものではなく、氷期の気候の乾燥化による河川の掃流力の低下が原因であると考えた。

上黒岩遺跡の位置する久万川流域は、仁淀川水系の上流域に相当し、山間地における河谷を形成

している。流域の山々は標高 1,000m 以下であり、米倉ほか編 [2001] に示された四国付近の氷期における推定森林限界の 1200 ～ 1300m より低いことから、氷期においても流域の山地は森林に覆われていたと考えられる。ただし、久万川流域特に上黒岩遺跡付近では、岩陰を形成するような石灰岩体が山地斜面上に多数分布している。これらは、寒冷期の活発な凍結融解作用により破碎が促進されたと考えられることから、久万川流域では氷期における岩屑の供給が増大した可能性がある。上述したように氷期の降水量の減少が全国的であるとすれば、最終氷期の久万川流域の河谷も、石灰岩破碎礫の増加と河川の掃流力の低下によって、埋積が進んだことが推定される。上黒岩遺跡の発掘調査報告では、上述した最下層の第 14 層は青褐色粘性土層とされているが、その上位の第 13 層は「落盤層」と記載され、第 12 層の青褐色粘性土層を挟んでその上位の第 11 層は「破碎礫層」と記載されている。これらの堆積層は、筆者は確認することができなかったが、その層名からは角礫状の巨礫を含む石灰岩礫からなる堆積物であることが推定される。まさに、氷期において石灰岩体の破碎から生じた礫が、山地斜面を流れ下り堆積した様子を示唆していると言える。なお、氷期における岩屑の斜面の流れ下りは、主に重力による這い下り（クリープ）であると考えられており、その速度は、流水による土砂移動に比べるとかなり低速であったと考えられている [米倉ほか編, 2001]。

埋積の進んだ久万川の河谷の地形景観としては、河道（いわゆる河原も含む）の縁辺から直に谷の側壁である山地斜面が立ち上がっている様相が推定される。最終氷期の頃すなわち考古学上では旧石器時代に相当する頃に上黒岩遺跡周辺でも人間の活動があったとするならば、今よりも広い河原で採取活動や石器の製作などの作業が行われていたかも知れない。しかし、現在でもキャンプ時に河原にはテントを張らないという鉄則があるように、広い河原は旧石器人の居住空間となることはなかったと考えられる。したがって、もし一時的にせよ居住という行為があったとすれば、やはり雨露のしのげる岩陰を利用したかも知れない。ただし、氷期の岩屑の堆積速度が緩やかであったとすると、人間が利用した痕跡のうち、石器などの遺物は残ったであろうが、炉跡やピットなどの遺構は、放棄後に埋積されるまでの時間が長いために残り難かった可能性がある。

(2) 晩氷期における久万川の段丘の形成と縄文時代草創期人の活動

約 20,000 年前の最終氷期最盛期を過ぎ、その後の温暖化の始まった頃は晩氷期ともよばれている。Lambeck et al. [2002] による世界各地の海水準変動の記録からは、約 15,000 年前頃に急激な海水準の上昇が読み取れることから、この頃を晩氷期の始まりとみることもできる。温暖化による降水量の増大により、山間地の河谷では、堆積作用よりも侵食作用が卓越することとなり、氷期の河谷内を厚く埋積していた礫層が下刻され、段丘が形成される。一方、山地斜面では、石灰岩体の破碎は鈍り、岩屑の生産量は減少したものの、降水量の増大により、水を含んだ岩屑が斜面を流れ下る岩屑なだれが発生する。上黒岩遺跡の岩陰下で観察された第 10 層や第 8 層などは、晩氷期に発生した岩屑なだれの堆積物である可能性がある。

さて、その第 10 層と第 8 層の間には、第 9 層とされた縄文時代草創期前半の遺物包含層が挟まれている。第 9 層の遺物を遺した人々が活動していた頃の久万川流域では、おそらく山地斜面と久万川の河原との間に段丘が広がっていたことが推定される。人が利用する地形と言う視点において

段丘が河原と大きく違うところは、よほどの大洪水でもない限りは降雨時でも冠水しないということである。すなわち、居住も含めて日常的な生活空間としての利用の可能な地形が、縄文時代草創期には出現していたと考えられる。前述したように縄文時代草創期には日本各地で住居状遺構が確認されていることから、上黒岩遺跡でも居住空間を岩陰に限定することではなく、段丘上に住居を築いていた可能性は十分にあると考えられる。同様のことは、第6層に遺物を遺した縄文時代草創期後半の時期についても考えられる。

なお、小林〔2010〕は、上黒岩遺跡の縄文時代草創期について、土器の出土量や石器の種類構成およびその量などから、狩猟活動に特化したキャンプサイトであったと考えている。このような想定の場合、活動空間の中心はやはり岩陰前面に広がった段丘上であり、岩陰よりもむしろ多数の活動痕跡を残した可能性もあると考えられる。さらに、岩陰下で縄文時代草創期遺物包含層を覆う堆積物は、上述したように水を含んだ岩屑なだれの可能性があるから、氷期のクリープとは異なり、その堆積速度は速く、場合によっては一瞬の可能性もある。この岩屑なだれは当然のことながら段丘上にも及んだと考えられるから、段丘上にあった遺構や遺物がその下に埋没したということも想定できる。

実際に、縄文時代草創期の洞窟や岩陰遺跡の前面に生活空間が確認された事例としては、山形県南部の米沢盆地東北部高畠町に所在する日向洞窟遺跡西地区〔佐川・鈴木編、2006〕などをあげることができる。日向洞窟遺跡西地区は、洞窟の形成された凝灰岩からなる山地急斜面縁辺から伸びる尾根状の緩斜面上に位置しており、尾根状の緩斜面は周囲の低地よりも10m程度高い高台となっている。周囲の低地は、大谷地とよばれており、現在は水田となっているが、もとは泥炭地が広がる低湿地であり、水田の開拓は江戸時代はじめ頃という記述がある〔山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館、2007〕。調査区は洞窟から100～150mほど離れているが、多量の石器と縄文時代草創期の土器が出土し、特に石器の状態やそれらの出土状況から、槍先尖頭器を中心とする石器製作址であったと考えられている。また、住居の可能性もあるとされている大形竪穴状遺構も1基確認されており、発掘調査者は、洞窟だけが恒常的な居住空間ではなかったという考えから、この遺構にも注目している。大谷地の泥炭層は、隣接する川樋低地の泥炭層が3万年前頃には既に形成されていた〔中山・宮城、1984〕ことから、おそらく同様にその頃にはすでに形成されていたと考えられる。したがって、日向洞窟遺跡西地区に石器製作址を遺した人々が活動していた頃すなわち縄文時代草創期にも、高台の周囲には広大な泥炭地が広がっていたと考えられる。その場合、日向洞窟遺跡西地区の立地する高台は、降雨時でも冠水しないという性質において、上述した上黒岩遺跡周辺の河岸段丘との地形的共通性が高いとすることができる。また、日向洞窟遺跡西地区の縄文時代草創期遺物包含層は、無遺物層とされる砂礫層の直下から検出されていることにも注目される。この無遺物層とされた砂礫層は、背後の山地を構成する凝灰岩礫を含むしまりのない砂質の層であり、調査区内では山側で薄く、谷側で厚く堆積する傾向を示すと記載されている。この記載および土層断面の写真から、無遺物層は背後の山地から流下した岩屑なだれの可能性があると考えられ、縄文時代草創期の石器製作址が良好に遺されたのは、短期間で埋積したためではないかと考えられるのである。日向洞窟遺跡西地区の事例は、上述した上黒岩遺跡周囲の段丘上に縄文時代草創期の遺構や遺物が遺されている可能性の高いことを支持しているとも考えることができる。

(3) 後氷期における久万川流域の地滑り堆積と縄文時代早期人の活動

上黒岩遺跡における縄文時代草創期後半とされた第6層の時期は、その年代から、地球規模の環境変動における新ドリラス期にほぼ相当する。新ドリラス期は、上述した約15,000年前頃から始まった温暖化が止まり、いわゆる「寒の戻り」といわれる寒冷期である。黒色土とされている第6層の形成は、寒冷化により再び降水量が減少したことによって岩屑なだれの発生頻度が下がったために、安定した地表面上で土壌化が進んだことを示唆していると考えられる。そして、その土壌が発達した地表面を埋めたのが第5層である。第5層も砂礫層であるが、泥質片岩礫を主体とし、第8層や第10層の石灰岩礫に比べて礫径は細かく、淘汰もよい。これらの特徴から、第5層は、晩氷期に発生した岩屑なだれとは異なり、山地斜面を構成する基盤岩である泥質片岩の風化岩屑がはがれ崩れる現象いわゆる地滑りの堆積物であると考えられる。第5層は、縄文時代草創期後半の第6層と縄文時代早期の第4層との間に挟まれていることから約10,000年前頃すなわち後氷期の堆積物であることが推定される。第5層は現在と同様の気候条件下で発生した地滑り堆積物に相当するものであろう。実際に現在の四国山地は、地滑りや斜面崩壊による大規模崩壊地形の多い地域とされており[太田ほか編, 2004]、大規模崩壊地形の分布密度でみると御荷鉾帯が最も高く、次いで三波川帯、秩父帯の順となっている[寺戸, 1986]。さらに三波川帯の中では泥質片岩の分布域に大規模な崩壊地形が見られるとされ、地滑り指定地も多い[寺戸, 1986]。

第5層の地滑り堆積物は縄文時代草創期後半の遺物包含層を埋積しており、同時に岩陰の前面に広がる段丘上にも堆積したことが想定される。段丘上でも縄文時代草創期後半の人々の生活があったとすれば、それらを埋積している可能性もあると考えられる。

第5層の地滑り堆積物の上位に形成されている縄文時代早期の遺物包含層である第4層からは、多量の石器が出土し、その石器組成にも多様性がみられ、さらに複数時期におよぶ土器とその出土量の多いこと、そして埋葬人骨が出土するなど、明らかに縄文時代草創期とは様相が異なることから、前述したように春成[2009]は老若男女の集団が一定期間ここで生活していたと考え、小林[2010]も通年的な居住が行われたと考えている。このような早期の様相からは、草創期以上に岩陰前面の段丘上が生活空間の中心となっていた可能性の高いことが示唆される。この場合、段丘上には集団の暮らす住居が数軒でも作られていた可能性があると考えられる。

③……………上黒岩遺跡における段丘の認識

現在の上黒岩遺跡周囲の簡略化した地形図を図8に示す。また、図9には現在の上黒岩遺跡周辺の景観を示す。久万川と山地斜面との間に広がる狭小な段丘上に住宅があり、畑および水田が広がり、人々の生活空間の主体をなしている。この狭小な段丘は、晩氷期になって形成された地形であると考えられることから、その頃すなわち縄文時代草創期前半頃から人々の生活空間となっていた可能性のあることを述べた。岩陰の発掘調査では、それ以降の時期も縄文時代草創期後半、縄文時代早期、縄文時代前期初め、縄文時代後・晩期、古墳時代という各時代の人々の活動痕跡が確認されている。しかし、例えば弥生時代が認められていない、古墳時代よりも後の時代が認められてい





図9 上黒岩遺跡前面の段丘の現状(小林謙一氏撮影) 段丘上には住宅が並び、舗装道路が敷かれ、段丘斜面は著しく改変されて水田や石垣が築かれている。

ないなど、連綿というわけではなく間欠的とも言うべき出土状況である。可能性として弥生時代や古墳時代などでは、岩陰を利用することなく、段丘上で生活が展開されていたとも考えることができる。そして、その姿が現在まで続いていることを図9は示しているのではないだろうか。

これまでのところ、上黒岩遺跡周辺の段丘上では発掘調査はほとんど行われたことはなく、段丘上から土器や石器が出土したという事例の報告もない。しかし、今後もし、上黒岩遺跡周辺の段丘上で大規模な発掘調査が発生した場合には、岩陰での発掘調査成果に関連した遺構や遺物の検出が期待できるとともに、岩陰では認められなかったような時期・時代の遺構や遺物も検出される可能性がある。上黒岩遺跡の周囲の段丘上は、発掘調査の対象としてまだ十分な価値を持っていると考えられるのである。

引用文献

- 春成秀爾, 2009, 第5部研究の成果と課題. 国立歴史民俗博物館研究報告第154集 共同研究 愛媛県上黒岩遺跡の研究(春成・小林編), 525-547, 国立歴史民俗博物館.
- 春成秀爾・小林謙一編, 2009, 国立歴史民俗博物館研究報告第154集 共同研究 愛媛県上黒岩遺跡の研究, 620p., 国立歴史民俗博物館.
- 小林謙一, 2010, シリーズ「遺跡を学ぶ」070 縄文文化のはじまり・上黒岩岩陰遺跡. 新泉社, 93p.
- Lambeck, K., Esat, T. M., Potter, E.-K., 2002, Links between climate and sea levels for the past three million years. *Nature*, vol. 419, 199-206.
- 中山知子・宮城豊彦, 1984, 閉鎖系堆積物から見た最終氷期中葉以降の環境変化と斜面発達過程—山形県川樋低地一, *東北地理*, 36, 25-38.
- 太田陽子・成瀬敏郎・田中真吾・岡田篤正編, 2004, 日本の地形6 近畿・中国・四国. 東京大学出版会, 383p.

-
- 佐川正敏・鈴木 雅編，2006，山形県東置賜郡高島町 日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究Ⅰ 縄文時代草創期の
槍先形尖頭器を中心とする石器製作址の様相．六一書房，136p.
- 須貝俊彦，1992，利根川支流，碓氷川における中期更新世以降の河成段丘発達史．地理学評論，65，339-353.
- 寺戸恒夫，1986，四国島における大規模崩壊地形の分布と地域特性．地質学論集 28，221-232.
- 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館，2007，押出遺跡．118p.
- 米倉伸之・貝塚爽平・野上道男・鎮西清高編，2001，日本の地形Ⅰ 総説．東京大学出版会，349p.

(パリノ・サーヴェイ株式会社，国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2010年9月27日受付，2011年5月20日審査終了)

Living Space at the Kamikuroiwa Site in Ehime Prefecture : In Connection with Settlement at the Initial Stage of the Jomon Period and in the Early Jomon Period

YAHAGI Kenji

The Kamikuroiwa site in Ehime Prefecture which is the remains of the initial stage of the Jomon period and the Early Jomon period has been excavated and investigated as a rock shelter site so far. Recently, according to the re-investigation and re-evaluation of the results, it has been regarded as a camping site associated with hunting activities at the initial stage of the Jomon period and as a place where certain groups dwelled throughout the year in the Early Jomon period. However, there is no specific record of construction found from the rock shelter. Considering the distribution of the limestone massif making up the rock shelter of the Kamikuroiwa site and the distribution of pelitic schists making up the mountains as well as the climatic variations from the initial stage of the Jomon period to the Early Jomon period, it is presumed that such a living space where construction remains were left was located at the terrain on the narrow terrace formed between the mountain slope and the Kuma River.

Key words: the Late Glacial Period, Younger Dryas, aggradation and erosion at river valley, living space, vestiges of activities